

河川敷のチョウ類の1年の生活 (兵庫県のチョウ類のトランセクト調査3)

近藤 伸一

はじめに

兵庫県下の色々な環境下において、トランセクト法でチョウ類群集の調査を行っている。この調査の積み上げによって、チョウ類を指標とした手軽な環境調査が出来ないか模索しているところである。

今回は河川敷で生活するチョウ類の1年間の生態を観察した。

調査場所は兵庫県北部、円山川の中流部の右岸河川敷で、畠地、水田に利用されている。この地域内(養父市八鹿町坂本)で1,200mのコースを予め定め、2001年4月から11月にかけて月3回の割合で延べ23回の調査を行ったので、河川

敷の環境下におけるチョウ類の種類、数、発生時期、蝶指数などを報告する。

I 調査の概要

調査地(養父市八鹿町坂本=図1)は円山川河口から約30kmさかのぼった中流部(図2)の右岸と、円山川に流れ込む大江川(図3)周辺である。この付近は標高が約30mで、農地、人家、県道などが沖積層の河川敷上に広がっている。

当地域は平坦で、樹木は土手の一部を除くとほとんどなく、一帯は農地に利用されている。円山川とその支流大江川の堤防は、不定期ではあるが草刈りが行われ、河川に面した斜面部分

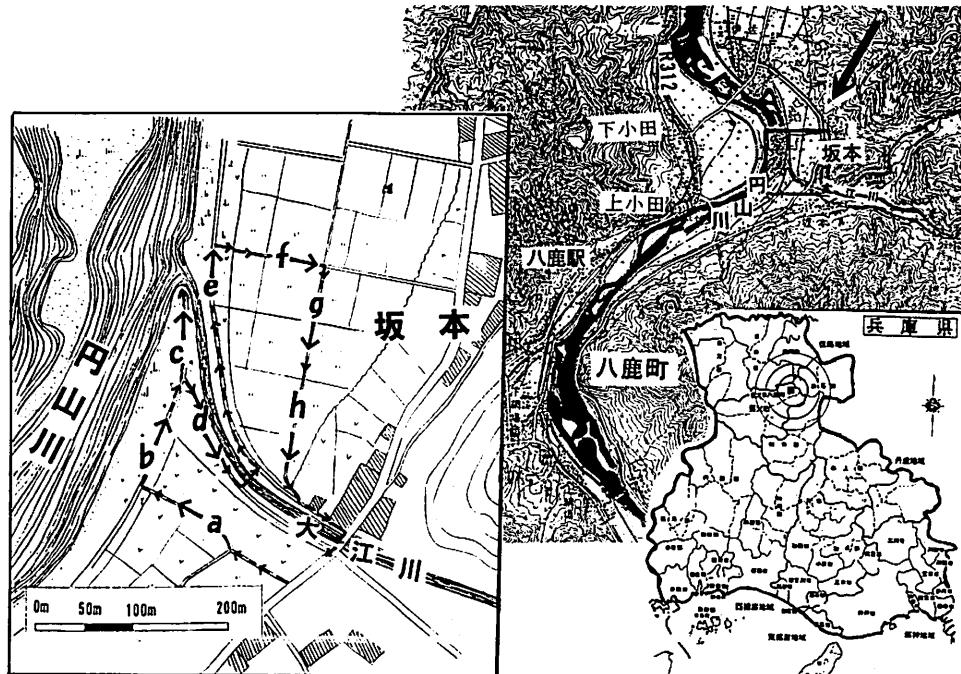


図1

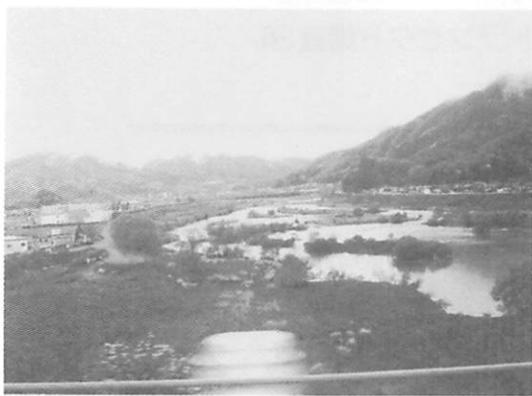


図2



図3

は植生相は比較的多様であるが、堤防上の歩道周辺や農地内の歩道は草本類の種類数が少ない。

調査コースは(図1)のように農地、円山川堤防、大江川堤防など河川敷の色々な環境を通過するように設定した。

コースの状況は、農地内のあぜ道200m(写真a)、円山川堤防200m(写真b.c)、支流大江川の土手道300m(写真d.e)、水田のあぜ道400m(写真f.g.h)、人家、県道100m、合計1,200mである。

II 調査方法

(1)時期等

2001年4月6日から11月28日にかけて月に3回の割合で延べ23回の調査を行った。時間帯は晴れた日の12時10分～50分の40分間である。

(2)方法

調査方法はトランセクト法で行った。全長1,200mのコースを約40分間で歩き、左右及び上部約5mの範囲内で目撃したチョウ類を種毎に、同一個体をだぶらないように注意しながらカウントした。種の同定は主に目視で行ったが、目視で同定出来ないものは双眼鏡で確認するか又は採集した。

(3)蝶指数

チョウを環境指標とするため、服部ら(1997)の5段階で表した指数値を利用した。
蝶指数5(原生段階)・蝶指数4(二次植生段階)・
蝶指数3(農耕的段階)・蝶指数2(住宅地段階)・
蝶指数1(都市段階)

III 調査結果

1 チョウ類群集の特徴

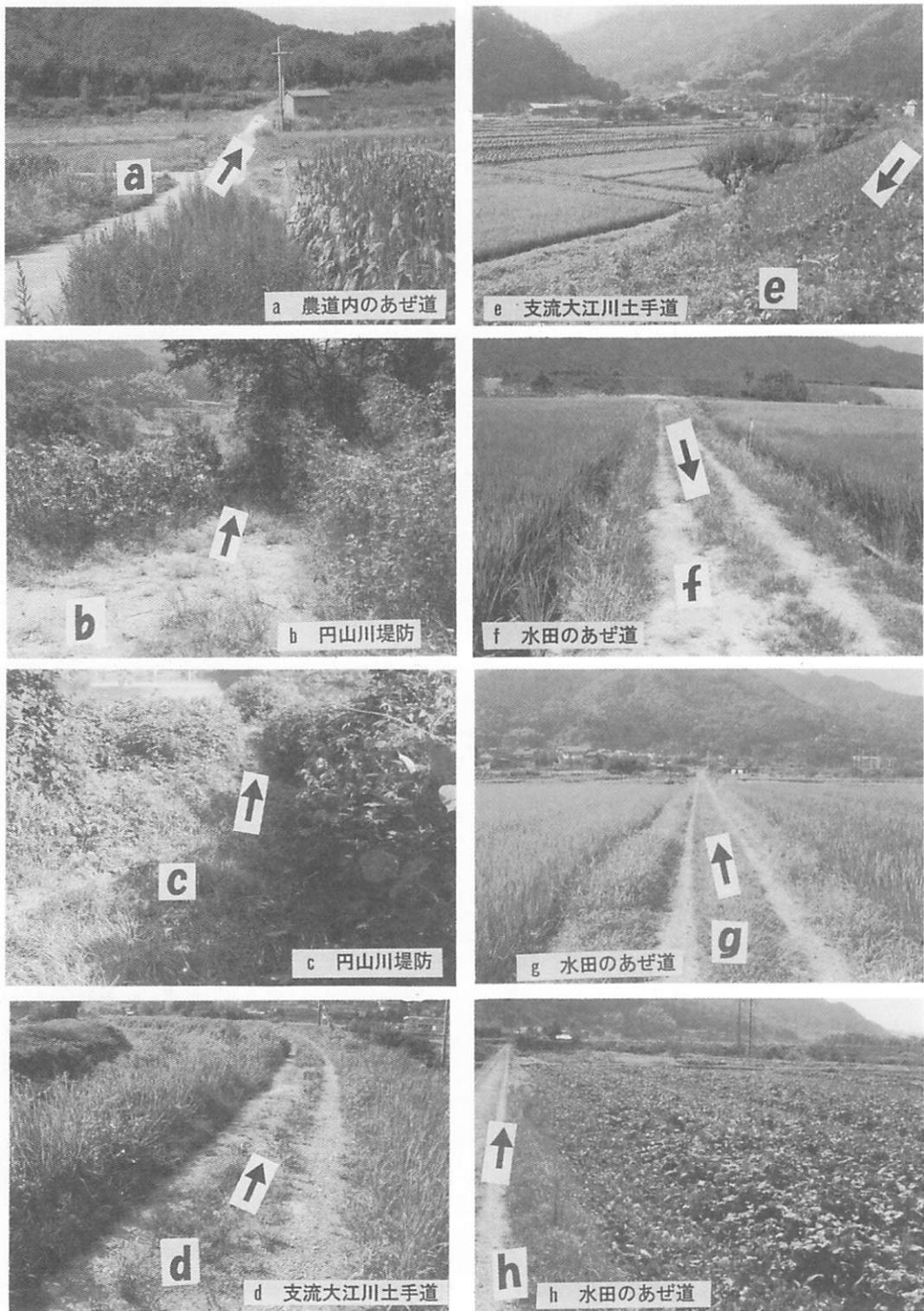
調査の結果8科37種1,070個体を記録した。チョウの調査日別の個体数を表1に示した。

なおキマダラヒカゲについては、サトキマダラヒカゲかヤマキマダラヒカゲか確認出来なかつたので、キマダラヒカゲとした。

① 調査区域が農地周辺であったため、種類数が少ない(37種)

② モンシロチョウ、ヤマトシジミと一番自然性の低い場所(都市段階:蝶指数1)に生息する2種が1,2番目に多かった。

調査地のコースの状況写真（図1のa～h）



- ③ ヒメウラナミジャノメ(農耕地段階：蝶指数3)が3番目に多かった。
- ④ 確認した37種と少ないが、自然性の高い場所に生息する種の割合が多かった。(蝶指数4が11種、蝶指数3が11種)

2 種別個体数の割合

- ① 種別でみるとモンシロチョウ(236)が最も多く、次いでヤマトシジミ(199)、ヒメウラナミジャノメ(156)、キタテハ(98)、キチョウ(85)、ベニシジミ(78)、モンキチョウ(43)、ツマキチョウ(31)、スジグロシロチョウ(16)、ツバメシジミ(16)がベスト10であった。
- ② 上位2種が全個体数に占める割合は41%、3種では55%、5種で72%であった。
- ③ 個体数の少いものはカラスアゲハ(1)、クロアゲハ(1)、ツマグロキチョウ(1)、ツマグロヒヨウモン(1)、ルリタテハ(1)、メスグロヒヨウモン(1)、ヒカゲチョウ(1)、アオスジアゲハ(2)、ムラサキシジミ(2)、ヒメジャノメ(2)であった。これらの少ない10種が全個体数に占める割合は1%にすぎない。
- ④ 調査地におけるチョウの生息状況

調査地内の田畠および水田周辺で、モンシロチョウが発生し、田畠や農道の畦畔がヤマトシジミ、ベニシジミ、モンキチョウなどの発生地、河川の土手のカナムグラ群生地がキタテハの発生地となっていた。

モンシロチョウとヤマトシジミが多いのは、当調査コースの1/2以上が農地であったためと思われる。次いでヒメウラナミジャノメが多いのは、河川の土手の草地がヒメウラナミジャノメの生息に適したものと思われる。

カナムグラの群生地は県下各地でよく見られるが、キタテハの割合がこれほど多くなる場所は少ない。

3 蝶指数から見た河川敷の自然環境

各チョウごとの個体数と蝶指数をかけた値は表1の右欄のとおりで、その積は2,001で、この値を総個体数1,070で割った平均値は1.87である。当地区の自然環境を蝶指数で表すと1.87という結果になった。内訳は次のとおり

蝶指数5(原生段階)：は確認出来なかった
 蝶指数4(二次植生段階)は11種確認。
 蝶指数3(農耕の段階)は11種確認。
 蝶指数2(住宅地段階)：はキアゲハ、モンキチョウ、ヒメアカタテハ、ムラサキシジミ、ツバメシジミ、ベニシジミ、ウラナミシジミ、ルリシジミ、ウラギンシジミの9種
 蝶指数1(都市段階)は6種確認
 アゲハチョウ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、キチョウ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ

4 種類ごとの発生消長

① モンシロチョウ

発生個体数は236頭で一番多い。全個体数の22.1%であった。

発生場所は河川敷の田畠であるが、ここでは水田が中心で、畑地は小規模で家庭菜園的な利用であり、時期に応じて種々雑多な作物が栽培されている。

第1回目の成虫は4月上旬には発生しており、4月下旬がピークとなる。第2回目は5月下旬から出始め、6月中旬がピークで、この時期は年

間の最大の発生数となる。第3回目の発生個体数は少なく、7月下旬から8月中旬の間は見られなかった。

9月下旬頃から徐々に個体数が増加し、10月上旬にピークが現れ、11月上旬には姿を消した。

② ヤマトシジミ

発生個体数は199頭で2番目、全個体数の18.6%であった。

発生場所は農道の畦畔、草地などに分布するカタバミの群生地で、県南部では4月中旬から12月中旬にかけて見られるが、当地で最初に確認したのは6月末で、わずかに2頭であった。この時期の個体が第1化とは考えられないので、第1回目の成虫の発生個体数が極めて少ないか、または他の地区から移動してきた可能性もないとはいえない。いずれにしても冬季の気象条件が越冬幼虫に厳しいものと思われる。

次の世代は7月中旬頃から始まり7月下旬がピークである。8月下旬から9月上旬に最大のピークが見られ、その後個体数は減じるが10月下旬に最後のピークがあらわれ、11月中旬ごろから見られなくなる。

③ ヒメウラナミジャノメ

発生個体数は156頭で3番目、全個体数の14.6%であった。

発生場所は河川の土手が中心であった。5月上旬から10月上旬にかけて見られた。

第1回目の成虫は5月上旬一斉に発生し、年間のピークとなる。第2回目は7月上、中旬に少数が発生、第3回目は8月上旬頃から始まり8月下旬、9月上旬にピークがみられ、その後個体数を減じて10月には見られなくなる。

④ キタテハ

発生個体数は98頭で4番目、全個体数の9.2%であった。

発生場所は河川の土手のカナムグラの群生地で、越冬した成虫は4月から5月上旬にかけて見られた。

第1回目の発生は5月下旬ごろからポツポツと見られるものの、特にピークがないまま1~2頭見られるか又は見られない時期が夏から秋まで続き、10月中旬から突然多数が現れ、11月上旬までピークが見られた。

⑤ キチョウ

発生個体数は85頭で5番目、全個体数の7.9%であった。

発生場所は田畠や河川の土手などあらゆる場所で見られた。

越冬した成虫が4月上旬に少数見られたが、その後全く見られなくなり、第1回目の成虫は確認できなかった。次に成虫が現れたのは8月中旬で、10月下旬まで特に明確なピークが見られないものの常に10頭以上が見られ、11月下旬に見られなくなった。

⑥ ベニシジミ

発生個体数は78頭で6番目、全個体数の7.3%であった。

発生場所はギシギシなどが生育する田畠の畦畔、土手道の両側などで、4月中旬から11月中旬にかけて見られた。

第1回目の成虫は4月中旬ごろから発生を始め、5月上旬がピークがみられた。第2回目は6月中旬から発生が始まり、6月下旬がピークでその後は8月上旬までは1頭ずつ見られたが、その後は姿を消し、9月下旬から現われ、明らかな発

表1

調査月日	4.06	4.16	4.26	5.05	5.14	5.27	6.03	6.11	6.26	7.08	7.16	7.27	8.03
1 カラスアゲハ								1					
2 アゲハチョウ			1	3		1							
3 キアゲハ			1					1					
4 アオスジアゲハ						1							
5 クロアゲハ													
6 モンシロチョウ	10	10	12	6	7	29	31	43	2	4	2		
7 シジグロシロチョウ				7	5			2	1		1		
8 ツマキチヨウ	2	17	5	7									
9 モンキチヨウ		3	6	8	1	1	3	10			1		
10 キチヨウ	2	1											
11 ツマグロキチヨウ													
12 ウラナミシジミ													
13 ルリジンジミ								1	3				
14 ツバメシジミ			2								3	5	
15 ヤマトシジミ								2		8	27	10	
16 ベニシジミ	1	9	16	3				3	19	1	1		1
17 ムラサキンシジミ													
18 ウラキンシジミ								1			1		
19 ヒトリヒヨウモン								1					
20 ツマグロヒヨウモン													
21 キタテハ	10	9	9	2		1	1	1	2		2		
22 ヒメアカタテハ								1				1	
23 ルリタテハ		1											
24 コミシジ													1
25 ヒオドリシヨウ			1				3	2					
26 メスグロヒヨウモン													
27 テングシヨウ							1	1					
28 ヒメウラナミシジマノメ				65	8	3				5	4	2	
29 キマダラヒカゲ			1		3	1							
30 ヒメシヤノメ							1						
31 ヒカゲシヨウ													
32 ジヤノメシヨウ													
33 イモジセセリ										1			
34 キマダラセセリ													
35 ダイミョウセセリ													
36 オオチャバネセセリ													
37 チヤバネセセリ										1			
計	24	42	53	113	19	39	42	67	29	11	24	33	14
八鹿町坂本	4.06	4.16	4.26	5.05	5.14	5.27	6.03	6.11	6.26	7.08	7.16	7.27	8.03

8.14	8.29	9.05	9.26	10.04	10.19	10.25	11.06	11.20.	11.28	集計	順位	割合	指數	指數 合計		
												%				
											1	31	0.093	4	4	カラスアゲハ
											5	17	0.467	1	5	アケハチョウ
											3	25	0.28	2	6	キアゲハ
											2	28	0.187	1	2	オスジアゲハ
											1	31	0.093	3	3	クロアゲハ
2	1	12	21	26	16	2				236	1	22.06	1	236	モンシロチョウ	
											16	9	1.495	3	48	スジグロシロチョウ
											31	8	2.897	3	93	ツマキチヨウ
											43	7	4.019	2	86	モンキチヨウ
1	12	7	13	12	14	16	4	3		85	5	7.944	1	85	キチヨウ	
											1	31	0.093	4	4	ツマグロキチヨウ
											4	2	1.1	2	28	ウラナミシジミ
											5	17	0.467	2	10	ルリシジミ
											3	3	1.495	2	32	ツバメシジミ
5	35	36	17	15	9	29	5	1		199	2	18.6	1	199	ヤマトシジミ	
											78	6	7.29	2	156	ベニシジミ
											2	28	0.187	2	4	ムラサキシジミ
1		2									5	17	0.467	2	10	ウラキンシジミ
											3	25	0.28	4	12	ミドリヒヨウモン
											1	31	0.093	3	3	ツマグロヒヨウモン
2	2		1	17	18	13	7	1	98	4	9.159	3	294	キタテハ		
											1	4	0.654	2	14	ヒメアカタテハ
											1	31	0.093	3	3	ルリタテハ
2	1	3	4								11	12	1.028	3	33	コミシジ
											6	15	0.561	4	24	ヒオドリシヨウ
											1	31	0.093	4	4	メスグロヒヨウモン
											4	22	0.374	3	12	テングチヨウ
5	36	20	4	4						156	3	14.58	3	468	ヒメウラナミジャノメ	
											5	17	0.467	4	20	キマダラヒカゲ
											2	28	0.187	3	6	ヒメジャノメ
											1	31	0.093	4	4	ヒカゲチヨウ
2	4										6	15	0.561	4	24	シャノメチヨウ
1	1	1	1	1	2	2				9	13	0.841	1	9	イチモンジセセリ	
											4	22	0.374	4	16	キマダラセセリ
2	1										3	25	0.28	4	12	ダイミョウセセリ
											5	17	0.467	4	20	オオチバナセセリ
1		1	1								4	22	0.374	3	12	チャバネセセリ
											0	0				
15	104	86	63	70	75	97	33	15	2	1070		100		2001	計	
														1.87		
8.14	8.29	9.05	9.26	10.04	10.19	10.25	11.06	11.20.	11.28	合計					八鹿町坂本	

生ピークが見られないまま11月下旬には姿を消した。

⑦ モンキチョウ

発生個体数は43頭で7番目、全個体数の4.0%であった。発生場所はレンゲ畠や、草地などのシロツメクサ、アカツメクサなどの生育地である。

第1回目の成虫は4月中旬から発生し、5月上旬がピークである。第2回目のピークは6月中旬に見られたが、その後は7月中旬に1頭みられただけで、次に見られたのは10月に入ってからで、下旬まで見られた。

⑧ ツマキチョウ

発生個体数は31頭で8番目、全個体数の2.9%であった。

発生場所は河川の土手で、4月上旬から見られ、中旬がピークで、5月上旬まで見られた。

⑨ スジグロシロチョウ

発生個体数は16頭で9番目、全個体数の1.5%であった。

4月下旬・5月上旬に第1回目が発生、第2回目は6月中旬から7月中旬にかけて小数が見られたがそれ以降は確認できなかった。

⑩ ツバメシジミ

発生個体数は16頭で9番目、全個体数の1.5%であった。

発生場所はヤマトシジミと同じ場所で見られた。第1回目の成虫は4月下旬、第2回目と思われる成虫が7月中下旬、第3回目が8月下旬、9月上旬に見られた。

⑪ 11番目～15番目の種

確認数が12頭～6頭が11番目～15番目で次のとおり

ウラナミシジミは9月下旬から現れ、11月下旬まで継続して見られた。

コミスジは8月上旬から9月下旬にかけて、河川の土手の茂み付近で継続的に見られた。

イチモンジセセリは7月上旬に1頭確認し、次に見られたのは8月下旬からで以降10月下旬まで少數が継続して見られた。

ヒメアカタテハは6月中旬、7月下旬、10月下旬、11月上旬に見られた。

ヒオドシチョウは、4月末に越冬成虫が、6月上旬、中旬にクリの花で吸蜜する成虫が見られ、その後はまったく見られなかった。6月

ジャノメチョウは8月下旬から9月上旬がけに見られた。

⑫ 注目される種

オスジアゲハは県南部では多い種であるが、当地では少なく、5月、10月に各1頭確認できた。

ツマグロキチョウを10月に1頭確認した。当地での発生は見られなかつたので、秋の移動固體と思われる。

ミドリヒヨウモンが6月中旬クリの花で吸蜜する成虫と9月下旬、10月上旬にも見られた。

メスグロヒヨウモンが10月上旬に見られた。

オオチャバネセセリは減少著しい種であるが、9月上旬に5頭見られた。

5 観察記録

調査地の状況、目に付いた花を月ごとに記し、吸蜜していたチョウは種名を()内に記した。

チョウ類以外に目に付いた昆虫についても併せ

て記載した。

<4月>

(6日) まだ枯れ草に覆われ、モンシロチョウ、ツマキチョウが発生していた。越冬明けのキタテハがよく目に付いた。

(16日) 河川の土手、堤防などで多種の花が開花、ツマキチョウが盛りで、チョウ類の種類も増えだした。

キンボウケ、セイヨウタンポポ(モンシロチョウ)、ホトケノザ、ヒメトリコソウ、オトリコソウ、ムラサキケマン、セイヨウカラシナ、コンロンソウ

(26日) チョウ類の種類は更に増えた。スジグロシロチョウが発生し、コンロンソウの群落で多数見られた。

キンボウケ、セイヨウタンポポ(キアゲハ)、カラスノエンドウ(モンキチョウ)、ホトケノザ(ツマキチョウ)、ヒメトリコソウ(モンシロチョウ)、オトリコソウ、ムラサキケマン、セイヨウカラシナ、コンロンソウ(ヘニシジミ、スジグロシロチョウ、キタテハ)

<5月>

(5日) 引き続き多種の花が見られ、突然ヒメウラナミジャノメが大発生した。

セイヨウタンポポ(モンキチョウ)、カラスノエンドウ(モンキチョウ)、セヨウカラシナ(ツマキチョウ)、コンロンソウ(ヘニシジミ、ヒメウラナミジャノメ)、タピコン(モンシロチョウ、キタテハ)

(14日) ほとんど花はなくなり、夏草が伸びる。畑は耕され、土手の草の一部が刈り取られ、ノイバラが咲き始めた。チョウ類の種類や数も一気に減じた。ヒメウラナミジャノメが激減し、ツマキチョウ、スジグロシロチョウが姿を消した。

セイヨウタンポポ、セヨウカラシナ(ヘニシジミ)、ホワイトクローバー(ヘニシジミ)

(27日) モンシロチョウの数が増え、ウツギノヒメハナバチが土手の歩道上に多数の穴を開け

ていた。

<6月>

(3日) ヒメウラナミジャノメが見られなくなった。モンシロチョウは依然多く、交尾(6月3日←♂+♀)を確認した。ウツギノヒメハナバチは姿を消した。

クリ(キタテハ)

(11日) モンシロチョウが最盛期で、モンキチョウも多かった。

クリ(ミドリヒヨウモン、モンシロチョウ)、セイヨウカラシナ(モンシロチョウ)、ノアザミ(モンシロチョウ、キアゲハ)

(26日) ヒメジョオンの花が増え、初めてヤマトシジミを確認。ベニシジミが急増、モンシロチョウは激減し、モンキチョウが見られなくなった。ルリシジミがイタドリに産卵、コシアキトンボ、ハグロトンボの数が多く、ラミーカミキリが見られた。

ヒメジョオン(ヘニシジミ)

<7月>

(7日) 土手の草刈が全面に行われ、その影響かチョウの数は少ない。第2回目の新鮮なヒメウラナミジャノメが現れた。カタバミはよく茂り、ヤマトシジミに注意を払ったが確認できなかった。オオブタクサの葉でブタクサハムシの蛹が見られた。

(16日) 花はほとんどなくキリギリスの鳴声が目立つようになった。第2回目の新鮮なツバメシジミが発生し、チャバネセセリがスキの根元付近に次々と6卵を産み付けるのを確認した。オオブタクサの葉はブタクサハムシの食痕が目立ち、幼虫、成虫、蛹、卵と全てのステージが見られた。

ヒメジョオン(ヘニシジミ)、ヤフカソツウ

(27日) ヤマトシジミが最盛期となったが、チョウ類の種類数は少ない。

シロツメクサ(ヤマトシジミ、ツバメシジミ)

<8月>

(3日) 川の水が枯れる。土手の花はほとんどなく、オオブタクサが道の両側に茂る。ミンミンゼミとキリギリスの鳴声、ハグロトンボが多い。

セイヨウタンボ'ボ'、ムラサキツメクサ

(14日) 久しぶりにキチョウを確認。チョウ類の種類はやや増加、個体数は少ない。

(29日) 種類数、個体数が一気に増える。キチョウ、ヤマトシジミ、ヒメウラナミジャノメが最盛期。

キツネノマコ'(ヤマトシジミ)

<9月>

(5日) 種類、数ともに多い。ベニシジミとヒメウラナミジャノメが良く目に付く。オオチャバネセセリを初めて観察。

キツネノマコ'(キチョウ)、イヌクシジユ(キチョウ、チャバネセセリ)

(26日) 稲が実り、ヒガンバナ。モンシロチョウが増加、ウラナミシジミが畑地のツルナシイシゲンの花に集まっていた。ハグロトンボが多い。

キツネノマコ'、カタバ'ミ、ママコノシリヌ'イ、ツルナシイシゲン(ウラナミシジミ)

<10月>

(4日) モンシロチョウが更に増える。キチョウも依然として多い。コミスジが見られなくなった。

イヌタテ'、アメリカセンダンウサ(キチョウ)、ヒメシヨオン(ベニシジミ)

(19日) キタテハが急増した。ヒメウラナミジ

ヤノメが見られなくなった。

ミツソバ(イチモンジセセリ)、カタバ'ミ(ヤマトシジミ)、キツネノマコ'(アオスジアゲハ)

(25日) セイタカアワダチソウに多くのチョウが集まっていた。ヤマトシジミとキタテハの数が多い。オオブタクサの葉は少ししか残っていないがブタクサハムシが群れていた。

ミツソバ(キタテハ)、イヌタテ'(キタテハ)、セイタカアワダチソウ(モンシロチョウ、キチョウ、ベニシジミ、キタテハ、テング'チョウ)、キツネノマコ'(ウラナミシジミ)、セイヨウタンボ'ボ'(キタテハ、イチモンジセセリ)

<11月>

(6日) チョウ類の種類数、個体数ともに少なくなったが、セイタカアワダチソウの花に集まっていた。オオブタクサの葉はまったく枯れてしまつたが、ブタクサハムシは茎に少数見られた。

セイタカアワダチソウ(モンシロチョウ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ヒメアカタテハ)

(20日) セイタカアワダチソウの花は終わる。ミツソバの花が残っている程度。畑のニンジンにキアゲハの4令幼虫、ハクサイがモンシロチョウの幼虫の食痕で穴だらけになっていた。

(28日) チョウ類はほとんど見られなくなり、ウラナミシジミとキタテハ各1頭確認しただけ。ブタクサハムシの成虫が1頭見られた。

<参考文献>

石井実(1993)チョウ類のトランセクト調査

日本産蝶類の衰亡と保護第2集:91-101.

日本鱗翅学会(大阪)服部 保・矢倉資喜・武田義明・石田弘明(1997)蝶類群集による自然性

評価の一方法 人と自然NO8:41-52.

服部保・矢倉資喜・浅見佳世・武田義明・石田弘明

(1997) 三田市フラワータウンにおける蝶類群集からみた植生の自然性評価 植生学会誌 14:47-60
 近藤伸一(2002)水田地帯のチョウ類の1年の生活
 きべりはむし30(2):1-13

近藤伸一(2003)里山のチョウ類の1年の生活
 きべりはむし31(1): 57-75
 (KONDO SHINICHI)
 神戸市西区岩岡町岩岡619-57)

兵庫県で確認された蛾の種類数について

兵庫県産蛾類分布資料・29

高島 昭

兵庫県の蛾についてはデータベースの構築に合わせて、1998年から兵庫県産蛾類分布資料として分類群ごとに文献記録と未発表記録を列挙し、解説を試みている。しかし、このペースでいくと完結するまでかなりの年月を要すると思われる。そこで、現時点での兵庫県で記録のある蛾の種類数はどうぐらいあるのかについて整理してみた。ここで問題になるのは、文献上の情報のみで実際に標本を確認できていないものもかなりあることである。その中には誤報や同定ミス、記載ミス等の誤った情報もいくつかあると思われる。さいわい、兵庫県立人と自然の博物館には県内産の蛾のコレクションがかなり集まっている、これらの収蔵標本については博物館のご協力を得ながら、個体ごとに鋭意確認作業を進めているが、すべての文献記録を追跡確認することは不可能に近い。

しかしながら、種単位でなら分布の妥当性について論じることは可能である。つまり、明らかに記録に誤りがあると思われる「疑問種」を類推し、それに絞って追跡調査をすることは可能である。このことは、兵庫県産蛾類分布資料としてまとめる際に検討を試みており、その結果、いくつかの種については記録はあるものの県産種としての扱いを保留した方がよいと判断している。しかし、未検時もしくは情報不足により検討不能のものも多いのが事実である（とくに小蛾類）。

他方、「全国的な分布状況からみて兵庫県に分布していてもおかしくない種」も数多くある。これらは、個々の標本を確認した上で記録の妥当性について論ずるべきではあるが、文献上の記録を信頼してデータベースに含めている。これには土着していないと思われる種（いわゆる「迷蛾」）も含まれる。

このような不確実要素も含んでいることをあらかじめお断りしておき、現時点における兵庫県で記録された蛾の種類数を下表に示す（筆者採集による未発表記録も含む）。ここには先に述べた「確実に産す

ることが確認されるまで保留扱いにした方がよいと判断される種（…別記）は含まない。

また、多くの種では、新種として記載されて以来、種名や分類上の位置が変更されているものが多い。このような場合、同定に用いた図鑑等が報文中に記述されていないと現在のどの種をさすのか判然としないことも多い。とくに和名に異名を持つ種の場合、学名が示されていなければ種の特定ができない場合もある。このようなケースは、そのレコードはデータベースそのものから除外している。文献記録にはその当時種名が明らかでなかったものもあるが、これらもすべて「未同定扱い」としてデータベースから除外している。

たいへん前置きが長くなつたが、現時点における兵庫県産蛾類の種類数は2,240種類である。小蛾類についてはあまり積極的な調査がされていないこと、未同定のまま保留されている種が多いことをあわせ考慮すれば、近いうちに2,300種以上は記録できるものと考える。

リストから除外した種

文献記録はあるものの、誤同定、データ記載ミス等の可能性が高く、確実に産する（もしくは産した）ことが確認されるまで保留扱いにした方がよいと判断される種として次のようなものがある。いずれも標本が現認できておらず、兵庫県では分布している可能性が極めて低いもので、誤認であるか当時の知見から混同して報告されたと思われるものである。記録の発表者に問合せて誤認であることを確認できたものもいくつか含まれる。

フタベニオビノメイガ、マエベニトガリバ、スミレシロヒメシャク、ウラナミヒメシャク、コヒメシャク、クロマツスズメ、ヒメホウジヤク、クロソマキシャチホコ、クロヤガ、ウスベニキヨトウ、ワタリンガ